

1. 藤沢市妙善寺の徐福

(写真は津越氏の提供による)

① 妙善寺 (資料1 参照)

藤沢の妙善寺は、開山は真言宗の寺院としてであったが、文永8年(1271年)日蓮上人が当寺で休息した。この時の住職が教えを受けて日蓮宗に改宗した。天明2年の水害で、お堂は種類と供に流出したため、建立年月日等はわからなくなった。

大正12年の関東大震災で本堂全壊、昭和4年再建着手した。

(住職 杉本辨榮 著 「藤沢郷土誌」昭和8年による。)



妙善寺本堂

藤沢は遊行寺の門前町であったが、江戸時代には東海道の宿場が置かれ、妙善寺は本陣の近くにあり、藤沢の中心地の寺であった。なお、神仏習合で、敷地内には稲荷神社がある。

妙善寺の近くには白簀神社があるが、ここは以前は「寒川神社」と称して寒川比古を祀っていたが、鎌倉時代源義経を合祀し、白簀神社となった。妙善寺と白簀神社がつながりがあるのかどうかは、確認されていない。

② 徐福子孫の墓

妙善寺にある福岡家の墓に、「天文二十三甲寅歳肅道日正 居士」と刻まれた墓誌があり、裏面には「故人はいみ名を肅政と称し、俗名を正兵衛という。その祖先は秦の徐福から出ている。徐福は始皇帝の戦乱を避けて海を渡航し、我が神州(日本)まで来て、富士山の周麓に場所を選んで下り住む。それ故、子孫は皆、秦を姓とした。福岡を氏と為すものは、また徐福の一字を取ったのである。且つ、近くの地に秦野の名があるのは、肅政の一族の旧蹟に係るものらしい。これは、祖先の地を明らかにするに十分である。我が子孫は、そのことを永く記憶し忘れてはならない。



徐福子孫の墓碑(中央右の大きな石)

天文二三年甲寅(1554年)一月十一日」

(文の解説は池上正治氏による)

この墓誌は、年代が確認できる徐福関係の遺物の中では、日本国内で最古のものである。

③ 妙善寺の稲荷大明神

妙善寺の敷地内にある「正宗稲荷大明神」があるが、妙善寺は日蓮宗に改宗する以前は空海が開いた真言宗であった。この神社のご神体は稲荷神の木像だ。稲荷神については、鎌倉時代に成立したと判断される「稲荷大明神縁起」、「稲荷記」などに由来が記載されている。これらの記述によると、弘仁7年（552年）弘法大師空海が熊野の田辺で魏国（中国）から来た権化の相の老翁に会い、大師の仏法を守ることを約束した。その後老翁は婦人二人と娘二人を連れ、稲を担いで来て、東寺で空海に面会した。空海はその姿を見て、「稲荷」と呼びその姿を彫刻し、空海の守護神とした。

二人の婦人は、命婦（みょうぶ）であり、命婦とは元々は宮廷の女官の意味であるが、中世から、稲荷のきつねのことを言うようになった。

この老翁は、中国から熊野に来ており、また稲荷は渡来人の秦氏の氏神であることから、徐福が思い浮かぶ。空海は中国に留学しており、帰国後修験道と深く関わっている。また修験道は道教の流れを取り入れており、徐福は道教の前身である神仙の方士であった。空海や秦氏と徐福は時代が全く異なるので、歴史としてみることはできないが、稲荷神と空海の伝説の成立時期が、修験の活動が活発な中世であることを考えると、この伝説は徐福をモデルにしたことも考えられる。



空海、稲荷神と二人の命婦（きつね）



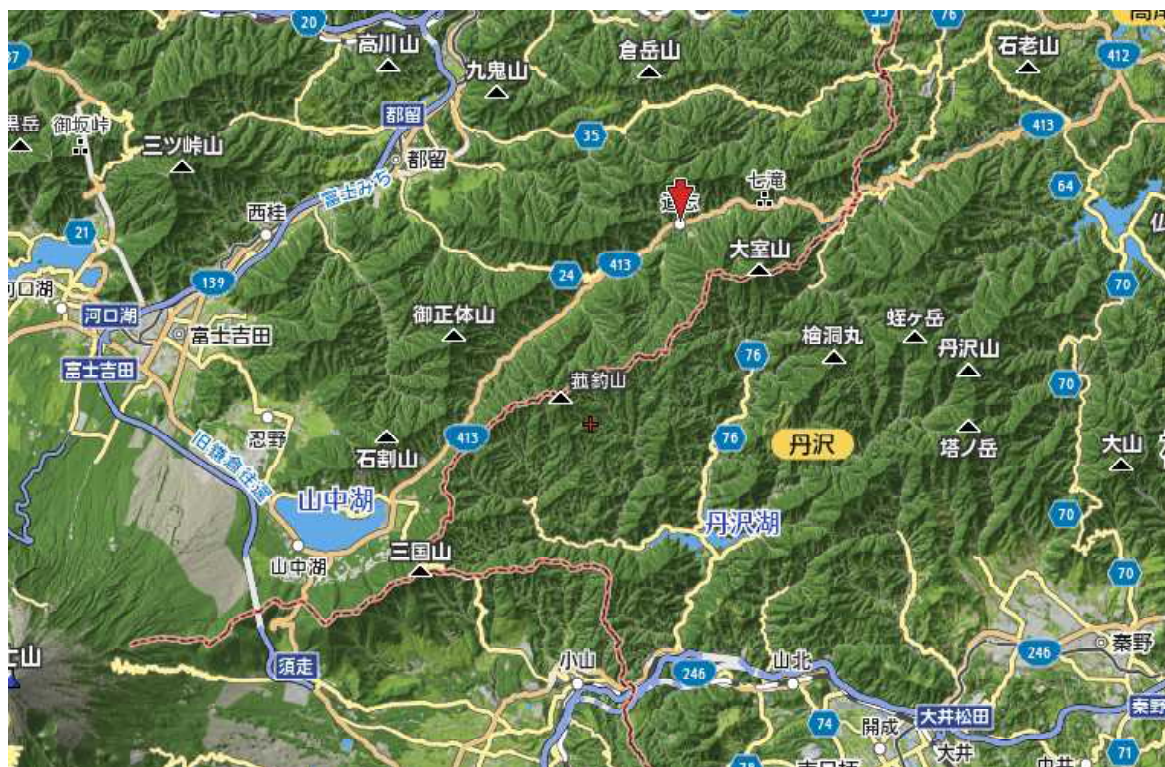
妙善寺敷地内の稲荷神社



稲荷神社内部（中国の徐福ドラマ撮影隊）

① 道志村の徐福伝説 (資料 2 参照)

伊勢原町勢誌（1963 年発行）には、大山から富士山にかけての修験者の歴史が書かれているが、その中で**山梨県道志村に残る徐福伝説**を紹介している。それによると、徐福は童男童女を使わし、富士山から大山にかけての山々に仙薬を探したが見つかることができず、500 人の童男童女はここに土着した、というものだ。この筆者は、これは歴史としては疑念があり、熊野の山伏によって徐福伝説がもたらされたと推測している。



富士山から大山にかけては修験道の活発だった地域。赤矢印は徐福伝説のある道志村

また、秦野市の大山のふもとの叢毛にある**宝蓮寺の縁起書**には、始皇帝の時にインドから僧が仏像を持って中国に仏教伝達に来たが、始皇帝は僧を殺そうとした。しかし徐福がいさめて僧は助けられてインドに帰った。その時にインド僧が置いていった仏像を、始皇帝の子孫が日本に持ってきて天皇に献上した、と記されている。仏教が中国に伝わるのは後漢の時代であり、実際に徐福が仏教と接することは考えられないが、仏教と道教が習合した修験道がこのような伝説を生み出したのではないだろうか。

御岳神社

神楽殿

閻魔堂

不動堂

大日堂

仁王門

本堂

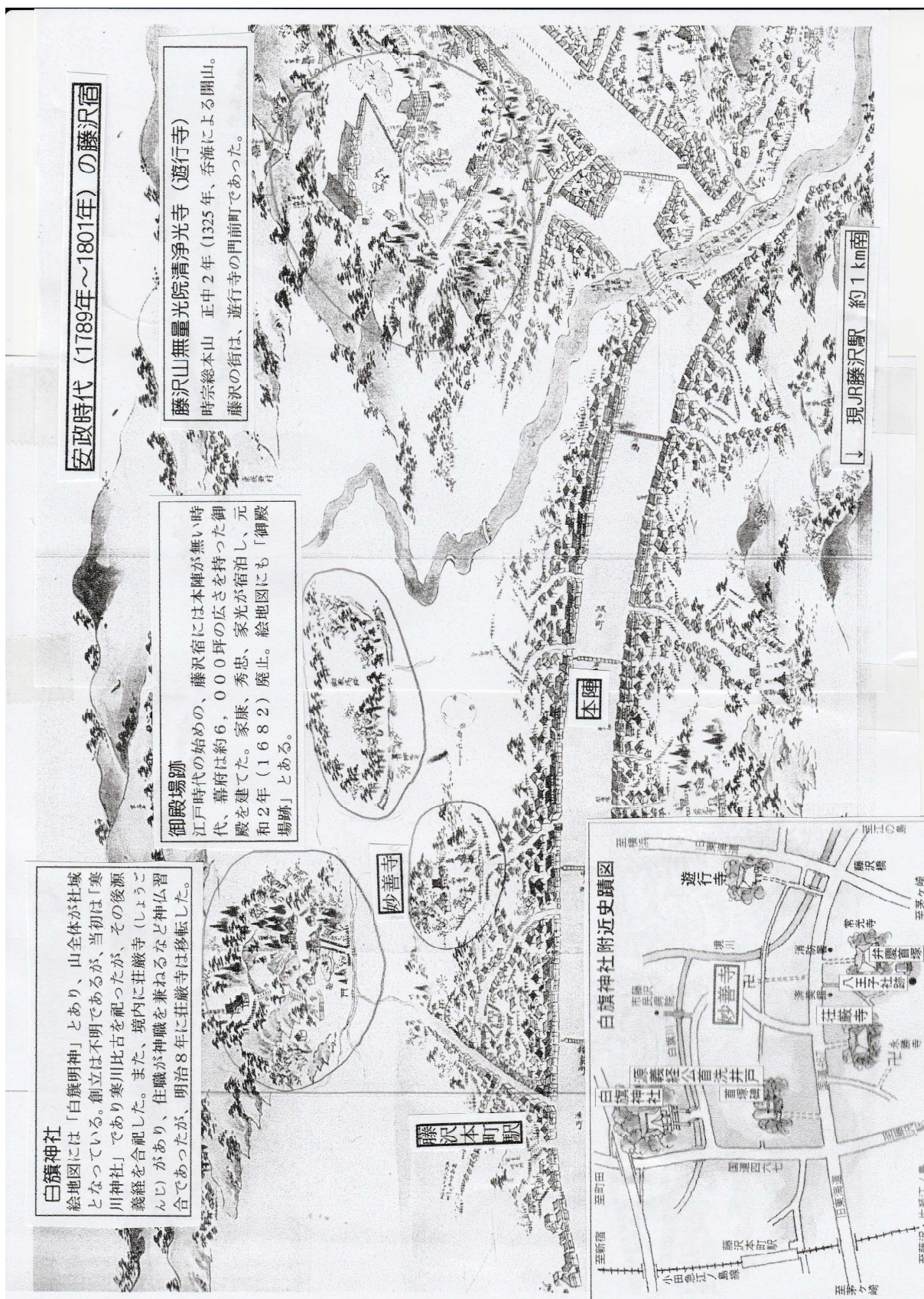
金剛水

平成三年三月

長野市教育委員会

秦野市 宝蓮寺

資料1 藤沢宿古地図



資料2

伊勢原町勢誌 第十章 修験道の発達と文化

修験道の発達

踏雲録事には「小角君（おつのきみ）の徒に義覚・義玄・義真・寿元・芳元という五人あり、これを五大山伏という。このころに助音・黒珍・日代・日円などの大徳あり、これらの徒弟役君の跡を追ひ、諸国において霊地を開創し、金峰山に准擬して一国一処に国峰（くにのみたけ）を興し、以て修行の道場とす。」とある。その中で義覚と義玄は役行者の直弟子で他の三名はその法燈をついでいる。また諸国には大峰に擬して国御岳（くにのみたけ）ができたことがわかる。

かくして修験道は全国各地の国御岳を中心として急激に発展したが、相模国では、大山・箱根山・八菅山・日向山・石老山・高麗寺山・河村山などがそれぞれ中心となつて発達したが、中でも大山は相模国の中心道場すなわち相模国の国御岳となり、相模一国だけでなく関東地方の霊山としてその名は全国津々浦々にまで知れわたつたのである。夫木集には相模国御岳山奉納の歌として前僧正隆弁が次のように詠じている。

古（いにしへ）の吉野を移す御岳山

黄金の花もさこそ咲くらめ

この歌によつて全国の中心道場である吉野の金峰山の蔵王権現が各国に移し祀られてその国の山岳修行の中心

道場として栄えたことがわかる。

このように山岳仏教が栄えた平安時代には山腹に寺院を建立し山頂には奥の院を祀ることが多い。大山の場合には現在の阿夫利神社拝殿の位置に大山寺（不動尊）があり、山頂に奥之院（石尊さん）がある。日向山霊山寺（りようせんじ）通称日向薬師の場合にも本堂の裏山に奥之院を祀っている。

高山は修験者や僧侶の行場となり、しかも未開の深山が好んでその修行場となつた。

相模国でもその大中心は大山であつたが、その背後に続く丹沢山が行場となり、さらに富士山へと連なる広範囲の山岳信仰を考えなければならぬ。山岳修行した行者は祈雨（きう）・止雨（しう）・疫病退散などをまじない一般民衆からも非常に尊敬されたのである。

当町にあつては相模国御岳としての大山と日向（日向薬師）が平安時代中期にはすでに相当発達していたようである。大山を中心として放射状に四方に通じている大山街道はその繁栄を無言のうちに物語っている。また町内では山岳地帯に山伏の修行に関連した地名が沢山あることでもわかる。日向山中には、四弁天・八蔵王・大黒天神平・地藏平・大日沢・不動沢・行者が池・不動滝・彌陀穴があり、栗原には聖峰（ひじりがみね）・笈平（おいだい

らがあり、大山にも笈平がある。また山伏の入峰（にゅうぶ）に關係して、札はりの木や、札はりのけやきが日向の尾高地区にあったが枯死して現存しない。これは木に札をはりつけて、祈禱した名残りである。山伏たちは峰にわけ入る前に修行をしてから心身ともに清浄無垢な状態となって丹沢山塊にその行場を求めたのである。

大山の山岳信仰に關連して山梨県の道志村に残る伝説で「秦（しん）の徐福（じょふく）が蓬来山（ほうらいさん）なる富士に不老不死の仙薬があると聞き及び、五百人の童男童女をつかわして求めたけれども得ること難く、たとへ幾とせついやそうともこの秘薬を手に入れぬ内は帰国を許さずと厳命した、やむなく五百人の使者は土着して相州大山までの連山を訪ね探して秦野に移住し、御正体山地蔵ヶ岳・薬師ヶ岳・丹沢山から大山を神仏に祈り探して、この地を蓬来山と呼んだ、しかしめざす仙薬は遂に見当らず、五百人の男女はここに帰化してしまった。」というのである。

これは伝説的な興味を持っており、歴史にどれだけの資料を与え得るかは疑念があるが、中国から宗教が伝来したことはうかがい得る。この徐福についての伝説は和歌山県の熊野地方にあるので、恐らく修行の大中心道場である熊野の山伏たちにより、全国各地に流布されたも

ので、山岳信仰と同時に帰化人の山間地定住についての示唆を与えるものであり、さらには大山から丹沢山塊、富士山を結ぶ一連の山岳修行にも關連を持つものと推察される。

修験者は不動尊を守本尊と仰いでいるが、不動尊とは仏教諸明王中の主尊で、密教（天台宗・真言宗）では大日如来（だいにちにょらい）と並んで最も広く信仰されている。顔かたちは忿怒相（ふんぬそう）で悪魔降伏の姿を現わし右手に持つ利剣は三毒の煩惱を切り払い、左手に持つ羅索（けんさく）は衆生（しゅじょう）をまよいからつれもどすに用い、全身を覆う火焰は一切の煩惱を焼きつくす大悲の徳相を現わしている。山伏が不動尊を本尊にしてから広く民間でも諸種の願望成就のために信仰されて今日にいたっている。

大山寺の不動尊をはじめとして大山街道沿いにある幾多の不動尊や日向薬師の一の木戸にあった石造の不動尊石倉の腰掛不動尊、各法印（修験行者＝山伏）をやっていた家々に現存する不動尊はかような意味を持っている。

資料3 宝蓮寺真名縁起 (一部) HP より

現代語訳：石川氏

後秦の始皇帝二十九年、沙門シツリは梵語で吉祥というが彼ら十八人がインドから晨旦く中国へ来た。シャリホンキョウ等の仏、宝物、閻浮檀金くエンブダンゴン 閻浮樹の森を流れる川から取れる砂金くの大悲像、五大尊、金剛力神等の秘仏を持ち来た。帝く始くは彼らを殺そうとした。徐福が申し上げるには『あなたが仙道を求めたいと思われるなら殺してはいけません』と。そこで帝は異俗を憎んで彼らを獄につながしめた。彼らは大悲五大尊の力により出獄した。宝物は皆大公く始くと徐福に遺し十八人皆インドへ帰った。くこの仏像群がく聖代く中国へに顕れるく例を示してみるとく、漢の第四代目文帝の三年甲子に少々顕れく仏像が世に出たく貴賤が信を増した。十二代哀帝の元寿元年己未、仏経が渡りく中国へ知識が滅ぶことはなかった。後漢の明帝永平七年甲子になると悉く繁栄して貴賤が市をなしたくこれらの仏像へ信仰く。摩騰法蘭力である。十四代献帝の建安五年庚辰、五大尊が破滅した。

そのとき後秦の始皇帝の子孫がその五大尊・大悲の像を守護して八十年あまりかかって大日本国応神天皇十五年甲辰、仏の宝物・大悲の像・五大尊を“秦の苗裔である”として日本へ渡ってきた。山城の国・葛野郡に住んで天皇に奏聞した。誉田別天皇（応神）はこれをお聞きになって『朕はこの仏具が来たことを知った。いま本朝は神国であり臣民が愚かで神仏が無二であるとの本旨を知らない。末世には仏法がかならずこの土く日本へに弘がるであろう。この尊く像くは聖代に当たって必ず発興するだろう』とおっしゃって彼を召しだして『汝は霊山に安置し守護せよ』とおっしゃった。その秦の苗裔く子孫くは東州に下向し長さ五寸の閻浮檀金くエンブダンゴンくの千手観音像を駿河の国・有度山の杉の上に置き朝日に三礼して言った。『大悲はフダラク山から来て衆生済度の本願に相違なく給う。時節を待ち給うべし』と述べた。そのとき大悲像は光明をあかあかと発した。その後、久能の霊夢によってその尊く像くが世に顕れたものである。五大尊を相模の国・足柄上郡に安置して曰く『金剛座にて悪魔を降伏し給う如く今、日域の衆生を済度し給う』と云って相州に居住するものである。ゆえにその地を秦くハタくというのは山城の国に始めて居住して奏聞く天皇へく申した所を太秦というくからであるく。その尊く像くは敏達天皇三年甲午の年から少々繁栄して推古く天皇の時代にくに至ると貴賤が市をなして感応叶わないことがなかった。これは皆以って太子く聖徳くの馬子である秦川勝くハタノカワカツくの勢力である。川勝と苗裔はく時代く前後はあるが一身という。また法道も一身という。仙道を得ると再生というくことがあるく。異説がある。秦く川く勝は大和の国・初瀬川より流れ来るという。欽明天皇の時代である。五大尊の謂れはおおかたこのようなものです。

く石川注く＝く原文テキストは“秦野市史“第1巻による。漢文体としておかしいと思われる点もあったが合理的に解釈した。原文の文字使いにできるだけ従ったくく長文の引用はネット資料によるくく石川は漢文・仏教の専門家ではないので間違いも多いと思われる。ご容赦・ご訂正を願うくく平成22年12月26日夜脱稿く



宝蓮寺の木造五智如来坐像 （製作推定年代：平安時代）
（徐福がインドの僧からもらった仏像？）

参考：「秦野」の地名由来は秦氏？

「秦野（はだの）」の由来（秦野市公式ホームページより）

秦野市の「秦野」という名称の由来については、いくつかの説があります。古墳時代にこの地を開拓した人々の集団「秦氏」（養蚕・機織りの技術にすぐれた渡来人の子孫の集団）の名に由来しているという説もそのひとつですが、現在のところ文献や考古資料から古代に秦氏がこの地を開拓したという証拠はみつかりません。平安時代に書かれた「倭名類聚抄」に秦野の古名は「幡多」だったとの記載がはじめて文献にあらわれます。鎌倉時代に入ると「吾妻鏡」や「保元物語」などの軍記物語に、平安末期にこの地の地名を名乗った「波多野氏」が登場します。しかし、「はたの」と「はだの」のどちらで発音されていたのかはわかりません。過去において「はだの」と呼ばれていたことが確実にわかる史料は、江戸時代に入ってから振り仮名の記載がある「東鏡」や「香雲寺文書」、「新編相模国風土記稿」などです。

